

「荒れ野の誘惑」 申命記6章16-19節、ルカ福音書4章1-13節

受難節を迎え、主のご受難を覚え、悔い改めの祈りもって日々を過ごしたい。

★今朝与えられた聖書日課は「荒れ野の誘惑」。悪魔から主は3度誘惑を受けられた。①「神の子なら、石をパンに代えてみよ」。空腹を満たすとは即ち、欲望を飽くことなく追い求める誘惑である。②「世界の支配権を与えるから、私を拝め」とは、支配欲を満たすためには手段を選ばぬ恐るべき誘惑である。③エルサレム神殿の屋根のから飛び降りてみよ。神は必ずお前を支えるから。主イエスを救い主として本当に神が立てるのかどうか、父なる神を試せという、恐るべき誘惑である。

★これらのすべての誘惑を主イエスは御言葉（いずれも申命記）によって退けられた。一方、悪魔も最後の誘惑では詩編を引用して迫る。サタンが御言葉で武装したら、私たち人間には到底、勝ち目がない。美しい装いをもって迫ってくるのが誘惑の真骨頂。だから「ルフィ強盗事件」で暴力を教唆するなど愚の骨頂。しかしプーチンの「ネオナチから守るため。戦死者は国の英雄」は美しい装いと見える。だが愚かな人間の見え透いた美辞麗句は小悪魔の仕儀で、誰も騙されはしない。

★私たち人類は、残念ながら悪魔の誘惑に乗せられた歴史を刻む。何よりも石をパンに変えてしまった。石ならぬ化石燃料からプラスチックに代表される技術革新を文明と称し、豊さを最大限の幸福と信じた結果、貧富の差の拡大、社会の分断、大気や海洋汚染、温暖化による気候変動によって今や人類は滅びの瀬戸際に立たされている。あの世界支配の誘惑、救い主へのいざないに乗った結果である。天地創造において神の似像とされた人間はバベルの塔の建設を試み、世界に散らされた。蛇にそそのかされ「神のごとき存在」と過信した哀れな人間の末路にほかならぬ。

★サタンの誘惑に立ち向かうには、「われらを試みに会わせず、悪より救い出し給え」との主の祈りに依るしかない。豊かに富み栄える社会にうごめくサタンの試み、そういう世界から私たちが逃れる場所はどこか。それはイスラエルの原点、荒れ野である。荒れ野はまさに荒涼として人が生きていけない世界。でも、イスラエルはそこで神と出会った。預言者ホセアは「まだ幼かったイスラエルを私はエジプトから呼び出し、わが子とした」との神の言葉を伝える。「それゆえ。私は彼女をいざなって、荒れ野に導き、その心にねんごろに語り掛けよう。そこで彼女は私に応える。おとめであったとき、エジプトの地から上ってきた日のように」と結ぶ。

★私たちの荒れ野とはどこか。神にしか頼れない砂漠とはどこか、主日礼拝にほかならぬ。豊かな肥沃なこの世で様々な試みにさいなまれる私たちが、帰り来る礼拝という砂漠には父なる神が待ち給う。そこに帰れる幸いを思う。レントの日々、悔い改めの祈りを捧げつつ、主日ごとにみ言葉により新しい命を与えられたい。

★新しい命を与えられた私たちは、み言葉で新たに武装して、再び社会に出てゆく。十字架を高く掲げて、主の喜びの福音を伝えよう。主の祈りを祈りつつ聖霊の導きに従って、和解の務めに励むことこそ、「キリストの体なる教会」の務めである。頭なるキリストの手足となって働くとき、サタンは退く。アーメン